

君への想いを無線に乗せて

RINTO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神崎晴人は一学生でありながら、クリエイター兼ストーリーマードである。

日々、ゲームのプレイ動画を上げたり、生配信しながらゲームをプレイしているそんなどこにでもいそうでいない羽丘学園に通う高校二年の男子である。

幼い頃からの幼馴染である今井リサと湊友希那との仲は悪くなつたわけではないが大きくなるにつれ段々つつながりは薄くなり……

とあることがきっかけで幼馴染の関係に大きな変化がもたらされることとなる

目次

第一章 君への想いを無線に乗せて

俺という人間

それぞれの想い

1

10

第一章 君への想いを無線に乗せて 俺という人間

一体何がきっかけだったのだろうか
人気が出たから？

ゲーム自体が元々好きだから？

支えてくれる人が居たから？

考えてみれば色んな要因が考えられるだろう。

自他共に認める飽き性な俺がここまで続けてこれたということ
は

曲がりなりにも好きでやっているということなのだろう。

これは俺とある幼馴染との軌跡である……

—————

真つ暗な視界の中に白い光がちらついている。

早く起きると太陽にでも言われているかのようである。

目が覚めてしまったものはどうしようもないので仕方ないので

重たい瞼を開けることにする。

カーテンの開かれた窓からは雲ひとつない青空が顔を覗かせて
いる。

こんな天気の良い日には外に出て遊びたくなるのが一般人的な
感性なのだろうか？

そもそも、なんの変哲もない平日に遊びに行くという発想が浮か
んでくること自体おかしな話なのだが。

俺、かんざきはると神崎晴人は羽丘学園に通うどこにでもいる平凡な高校生2年の男子である。

今日から夏休みも終わりが告げられ、地獄の2学期がスタートである。

俺の通う羽丘学園は昔は女子高だったらしい。

ただ、近年の少子高齢化などの煽りを受けたのか生徒数の減少に伴い共学化に乗り出したらしい…

まあ、そんなことは正直どうでもいいことなのである。

元々、女子高ということもあり生徒の割合は7対3と共学になってしばらく経つのだが、相変わらず男子生徒の絶対数は少ないままである。

世の男子高校生諸君はやれハーレムだの女子が多いから彼女が出来るだの邪な気持ちを胸に入学を決めた生徒も多い。

誠に遺憾ながら隣を歩いている俺の唯一の友人のわおまえしやうた大前翔太もその一人である。

2

「おい、晴人。さつきから誰と話してるんだ？

夏休みにゲームのやり過ぎで頭でもおかしくなったか？」

「んなわけあるかよ… てか、しれっと人の心を読むんじゃねえよ」

悪い悪いと、笑いながら謝ってくる翔太に苦笑いを返す。

普段から翔太とはこんな調子なのだが、なんだかだで小学校の頃から付き合いです。

かれこれ知り合ってから10年以上の腐れ縁でもあり、気の置けない唯一の友人、いや親友と言つていいのだろうか。

本人にこんなことを言った日には絶対に調子に乗りからかわれのが関の山なので絶対に言わないが…

「そういえば、夏休み期間の伸びはどうだったんだ？」

ふと、翔太から話を振られる。一般に伸びと言われて皆は何を思
い浮かぶだろうか：

身長、髪の毛の長さ、e t c…

人それぞれ考えつくことは千差万別であるだろうが、俺と翔太との
会話における伸びとは数字、視聴数のことを指す。

「ああ、まずまずつてところかな？長期休みは配信出来る日数も時間も
多いからな。いつそのことずつと休みならずと…」

「晴人、お前なあ… 前、あれだけ説教したのに。応援はするけ
どのめり込み過ぎるなって言ったよな？」

その翔太の言葉にあの苦い思い出をふっと思いつく。

高校生になり何か新しいことを始めたかった俺は、必死にアルバイト
として貯めたお金でPCを購入し、ゲーム配信者として活動を始めた
のであった。

勿論、始めたばかりの頃は叩かれるどころかそもそも見てもらえる
ことも少なく試行錯誤の連続であった。

よく翔太にも注意されるのだが、どうにも俺は何か集中すると周
りが見えなくなるらしい。

それも、寝食を忘れるレベルで…

そのせいで、学校は休みがちになり終いには栄養失調でぶっ倒れて
救急車で運ばれる始末である。その救急車の手配などをしてしてくれ
たのが翔太だというのだから頭が上がらないのだ。

もし、あの時翔太が心配して家に来てくれてなければどうなってい
たかと考えるとゾツとする。

というのも俺の親は普段は家を空けているのだ。

母親は幼い頃に病気で亡くしており、父親はその分必死に働いて
いるのだ。今は地方へ単身赴任中である。

そんなこともあり、高校生でありながら絶賛一人暮らし中の俺を気にしてか、父さんは翔太の家族に俺のことをよろしく頼んだらしい。

小さい頃から子供同士の仲が良かったこともあり、家族ぐるみでの交流がよくあったのだ。

「あのときは本当に悪かったと思ってるよ。お前が居なかったらどうなってたか分からんし。

ありがとな……」

「あの晴人がデレた!？」

「お前はいつつも一言余分なんだよ…… もう先に学校行くからな！」

「ちよつ、待てつて晴人」

朝から騒がしい翔太を後ろに引き連れながらようやく羽丘学園の校門までたどり着く。HRの15分前とあってぞろぞろと昇降口に数多くの生徒がなだれ込んでいる最中だ。正直言つて俺は人混みが得意ではない。どちらかといえば、嫌いな部類に入るだろう。

そんなことを考えながらダラダラと校門をくぐり昇降口を目指していると後ろから小さい頃からずっと聞いてきた二人の声が聞こえてきた。

「晴人、おはよー。今日も相も変わらず眠そうだねえ。あと、翔太もおはー」

「お、リサに友希那じゃん。おはようー。てか俺はついでかよ……」

「リサ？晴人は昔からこんななのだからどうしようもないわ」

「おい、友希那。朝一番にデイスるのはやめろや！」

後ろから仲良く歩いてきたのは俺の小さい頃からの幼馴染である今井リサと湊友希那だ。この二人とは家も近所で翔太よりも前から

の知り合いである。

こうやって学校で顔を合わせれば話したりもするが昔のように休みの日や放課後に誰かの家で遊ぶことはもうなくなってしまった。それもお互いに放課後や休みの日にやることが多いのが原因だといえるが。

友希那とリサは高校に入ってからバンド活動を本格的に始めたらしい。小学生の頃は友希那の親父さんが引くギターに合わせて三人で歌を歌ったりもしたものだ。その頃から友希那は三人の中でも飛びぬけて上手かった。バンドのボーカルを務めるのも納得である。

リサ達がバンドを始めたことを知ったのは翔太が教えてくれたことがきつかけであった。

その時は、翔太に呆れられてしまったが…… 幼馴染だからって何でも知ってるわけないだろ。

それに比べて、俺が普段休みの日や放課後にしていることはリサや友希那はおそらく知らないだろう。俺からも伝えてないし、翔太にも口止めをしてあるからだ。恐らく、このことを知っているのは翔太と俺の親父、普段のゲーム仲間ぐらいだろう。クラスメイトにもこのことは話していない。

正直なところ、ばれて馬鹿にされるのが怖いのだ。どうせお前じゃ無理だとか、人気が出るわけがないとか。嘲笑の言葉を冷やかしを受けたくなくて逃げているだけなのだ。特に日によっては深夜までやっていることも多い配信をリサには知られたくないのだ。

リサは他人からは今どきのギャルだと思われがちだが、小さい頃から本当に人の面倒をよく見る人である。その対象は彼女の友人すべてに向いているのだが、特に友希那は特別らしい。

もちろん、こんな俺にさえ向けてくれるわけで前に倒れたときは本当に心配をかけてしまった。それに滅茶苦茶怒られた。あの時は適当にごまかしたおかげで配信活動、ストリーマーとして活動している

ことは知らないだろう。

このことを知られて心配されるのも馬鹿にされるのも嫌なのだ。
何事も一人で抱え込んでしまいうりサのため、友希那を支えるために
頑張っているバンドのため、彼女達 Roselia のために。

—————

新学期初日ということもありそんなハードな内容もなく気が付けばみんなお待ちかねの昼休みである。教室の隅である俺の席で購買で買ったパンを翔太と男二人で食べるのがいつもの光景である。もともとは一人で食べていたのだが、勝手に翔太が椅子をもってきて一緒に食べるようにしてきたのだが……

一人で食べるのも楽ししのんびりできるのでいいものだが、気の置けないやつと昼飯を食うのも悪くない。まあ、そんな奴もクラスにどうかこの学校で翔太ぐらいなものだが。

おいそこ、友達少ないとかいうな！

友達なんかほんとに仲のいいやつ奴が片手いれば十分なんだよ。

あ、俺片手もいなかったわ……

自分で言つて悲しくなるからこれにてこの話終了。

そんないつも通りの昼休みが今日も当然のように来ると思っていた時期が俺にもありました。

「何で今日は屋上で食うなんて言い出すんだよ。まだ、日中は暑いってのに」

「今日だけは許せよ、晴人。今日しくじったらマジで死にたくなるから……」

「なんだよそれ…… ったく今度焼肉な」

「ああって。いや、おい。今日の昼めしのパン奢ったばっかだろうが」

こんなところはいつも通りとかかなんというか。まあ、一食分食費が浮いたので翔太には感謝なのだが、そこまでして屋上で食べる意味とは何なのか俺にはちよつとわかんなわ。

それにしても、翔太の持つてる紙袋の量おかしくないか？とても普段二人で食べてる量じゃないし、なんか袋の色も違うような……山吹ベーカーリーって書いてあるし学校の購買じゃないパンじゃねえかよ。

「おい、翔太。そのパンどうしたんだよ。購買のじやなさそうだし」

「あ、分かったか？まあ、すぐにどうゆうことかわかるよ」

そんなことを話しているといつの間に屋上に着いていた。ドアを開けると五人の女子が仲良く昼ご飯を食べているところだった。周りに人がいると食べづらいなだよなあ。翔太は一体何を考えているんだか。そんなことを考えていると友希那のようなきれいな銀色のウェーブがかかった髪をした子がタツタツと翔太に駆け寄っていったのだ。

「翔太せんぱい、例の物はちゃんと買ってきました？」

「おうよ、山吹ベーカーリーのパン15個はここにあるぞっ!!」

「さすが翔太せんぱい、話がわかりますねえ」

「当たり前だろ！それで例のチケツトはちゃんとあるんだろうな」

「もちのろんですともくモカちゃんは嘘はつかないので」

俺からしたら突っ込みたいところがいろいろとあるのだが、それよりも同じ高校の後輩、しかも女子の知り合いが翔太にいるとは驚きである。まあ、ミーハーな翔太ならコミユカも高いし知り合いがいても不思議ではないのだろう。

まあ、俺にしてみれば幼馴染に女子が二人いるだけで奇跡に近い話なので気にしたら負けである。

「あのく翔太せんぱい？お連れの人がオートパイロット状態ですけどいいんですか？」

「ああ、晴人には何も伝えてなかったんだ……ちよつとテンション上がって。ははは……」

「どうゆうことか説明しろや！」

それから、延々と翔太から彼女らの説明を聞かせられたのだが途中から彼女らの良さを演説してるだけになっていた。まあ、そこはとりあえず置いておくとして聞いた話を整理すると翔太と話していたモ

カという子と一緒にご飯を食べていた他の子たち五人で『After glow』というガールズバンドを組んでいるらしい。

こちら辺にはとライブハウスやスタジオが多くガールズバンドの聖地だと聞いたかことがあった気がするのと翔太の話を聞いていて思っ出していた。

それからは、延々とAfter glowの良さを翔太に聞きかせられながら、今日初めて顔合わせたAfter glowのメンバーと昼食を共にするという何ともカオスな状況になっていた。自己紹介を一応それぞれしたのだが何とも言えない決まづい空気は変わらないままであった。

本人たちの目の前でつらつらとほめ続ける翔太もあれだが、それをドヤ顔で胸張っている青葉も青葉である。他のメンバーはというと反応はそれぞれなのだが、美竹はあれだな。見た目はクールを装っているが滅茶苦茶喜んでるな。照れてるのを宇田川に指摘されて反論してるが上原にも笑われてるな。

これはあれだ、典型的なクーデレだな……

何とも言えない昼休みの終わり際になぜか青葉と連絡先を交換させられた。同じ学校で先輩だからと青葉は言っていたがそれは建前だろう。俺はそんなに頭がお花畑ではないので分かるものだ。翔太と青葉のやり取りを見れば分かる。

絶対にパシりにされる……

そんなこんなで、いろいろあった昼休みを乗り越え現在は下校時間である。幸い、俺と翔太は帰宅部なので帰りのHRが終わったと同時に家路についていた。いろいろありすぎて忘れていたが青葉からもらっていたチケットはなんなんだろうか。何かやましいものでなけ

ればいいのだが……

「そういえば、あのチケットて何のやつなんだ？」

「ああ、あのチケットな。あれは今度あるガールズバンドパーティー！のチケットだよ。確か五つのガールズバンドが合同でやるやつなんだぜ！今日会ったA f t e r g l o wも出るんだよね〜」

「へえ〜」

俺は音楽のを聴くのは好きだがインディーズのメジャーデビュー前のバンドや歌手を追っかけることはしたことがない。ゲームの種類にもよるのだがのんびりできるものや音があまり重要でないものをやるときはBGMとして好きなアーティストの曲を聴きながらプレーするものだ。

翔太はそうゆうマイナーな音楽が本当に好きなのかただのミーハーなのか知らないが素直に尊敬できる点である。

「Roseliaも出るぞ〜」

「なっ!! なにいいい!?」

それぞれの想い

「その反応を見るにずっとRoseliaのことが気になってたみたいだな」

「そ、そうだよ。悪いかよ……」

翔太の言ってることは正直凶星だった。確かにRoseliaのことを知ったのは翔太が教えてくれたからということはある。だが、昔からの幼馴染のリサと友希那がバンドを組んで頑張っていることを聞いたときは嬉しかったに決まってる。

リサ達がバンド活動をしていることが俺に知られていることを気付いているのかは分からない。会ったときにバンドの話題を出されたこともなければこちらか聞いたこともない。そこところは、お互いさまといったところなのだろうか。

もちろん、俺がやっていることに関してはばれていないと信じたい限りなのだが……

「このチケット二枚あるんだけど一緒に行くか？」

「えっ、いいの？」

「もともと、お前を連れていく予定でモカからチケットを譲ってもらったんだよ」

話を聞けば、もともとそのライブには行く予定だったらしく周りのお客が女性客が多く気まずいとの理由で俺を連れていくつもりだったらしい。リサや友希那達がどれだけ頑張っているかを見て欲しかったのもあるらしいが。

もともとはチケットを取り損ねてしまったらしいのだが、出演者の青葉に頼んでチケットを押さえてもらったらしい。そんなつてを使ってチケットを入手した翔太もそうだが、ものでチケットを譲ってしまう青葉もどうなのだろうか……

ほかに知り合いとかいなかったのだろうか。

「何はともあれチケットは苦労して手に入れたんだ。ドタキャンすんなよっ。」

「分かってるよ。てか、何でチケットの代わりに大量のパンなんだよ。」

もつと、ケーキとか女子が喜びそうなものの発想とかなかったのかよ……」

「いや、あれがモカの指定だからさ。メンバーに一つずつとは別にもう十個のパンをな。それ全部一人で食べちゃうからあいつ、ヤバイいんだよな……」

「マジかよ…… 男の俺たちより食ってるじゃねえかよ……」

後日、買い物物の帰りに青葉につかまり山吹ベーカリーで大量のパンを買わされるとは思いもしていなかった。

リサ side

私には友希那と同じくらい大事な幼馴染がもう一人いる。そう、晴人のことだ。友希那とは家が隣同士で晴人とは道路をはさんだ迎えに家がある。

小学校の頃は学校の放課後にはいつも三人で遊んでいた。それも今は昔の話で最近では三人で遊んだのは中学の1年生の頃くらいだと思う。友希那ともそうだけど、晴人も喧嘩したとか仲が悪くなったとかじゃないんだ。

それぞれ、高校は同じだけど部活も違うし晴人とはクラスも違うから話す機会もずいぶん減っちゃった。

朝、昇降口とかで会えば挨拶もするし世間話だつてするけど晴人はどこか昔と違ってよそよそしいんだよねえ。せつかく、友希那も昔とまではいかなくても笑うようになったし Rose lia のみんなともいろいろあったけど今は仲良くやれている。

だからこそ、晴人のことが気になってしまってるんだと思う。昔みたいに、また三人で。ううん、紗夜やあこに燐子、それに翔太とみんなで遊んでみたいなって思ったりしてみたり。友希那と私はバンドを本気で頑張ってるんだつてところを見てもらいたい。

ライブに来て Rose lia の音楽を聴いて私たちの今を見て欲しい。なんて、思ってみたりね。そもそも、私がベースを弾いてるこ

と自体知らなそうだよねえ、晴人のことだし。

「…サ、リサ？」

「へっ!? あつ友希那かあゝ もう、びっくりさせないでよゝ」

「私は次の授業が移動教室だから一緒に行こうと声をかけただけよ。いつもはリサがそうしてくれるのだけれど声をかけられなかったから……」

「ああ、うん。ごめんね友希那。ちょっと考え事してたかも！ それにしても、あの友希那から声かけてくれるなんて嬉しいなあゝ」

「もう、からわないで……教室には私たちがしかないし急ぎましょう」「オツケー!!?」

友希那が今みたいに声をかけてくれるなんて本当にうれしいな！昔までとは言わないけど私をからかったりしてくるし、Roseliaのみんなと出会って明るくなってホントにお姉さんうれしいなあゝあんまりからかうのと猫好きなことを出すと不機嫌になるのは今も昔も変わらいいけどね。

友希那をあんまり待たせても悪いし教科書を持ってささつと移動しますかねえー

「リサ？ 次の授業は数学ではなくて化学よ。教科書が違うようだけれど……」

「えっ！ あははっ…… ワタシとしたことが間違えちゃったよ！」

慌てて教科書を持ち替えていたら時間ギリギリになっちゃった。教室まで友希那を走らせちゃったし悪いことしちゃったなあ……

昔から運動はそんなに得意じゃない様子だったし今も後ろで息してるし。ごめんね、友希那。

そんなこともあったけど長い一日も終わってやっと放課後だよー今日はRoseliaでの練習の日だし気合を入れて頑張っちゃうぞゝ

いつもと同じように練習場所であるCiRCLEに友希那と歩い

ているんだけどなんか友希那の様子が変なんだよねえ。さつきから考え事してるのか唸ってるし。こんなに友希那が悩んでるってことは新曲か何か考えてるのかなあ。それとも大好きな猫のことだったりして。ちよつと私も気になるし聞いただしますかね！Roseliaのことなら相談に乗りたいしね。

「ねえ、友希那！（リサ！）」

「えっ!?」

あちやく こんなこともあるもんなんだねえ。

「友希那からお先にどうぞー！」

「そ、そう。なら聞きたいのだけど、リサは今日一日中何を考え事していたの？リサらしくないミスばかりだったしこの後の練習が心配になって……」

そこまで、友希那に心配かけちゃってたかあー 尻すぼみに声が小さくなってたけどそんなに恥ずかしくなくてもいいのになあ。バンドを理由にはいるけどやっぱり親友に心配してもらえる私って幸せ者だなあって改めて実感できたよ。日菜じゃないけど私的にもルンツてきたよ。

「ごめんね、心配させちゃって。そんなに深刻な話じゃないから安心してよ。実はさあー」

それからCiRCLEにつくまで友希那に今日考えていた晴人のことを話していった。私にとっては友希那と同じくらい大切な親友だし、少なくとも友希那にとってもそれなりに大事な友人の一人だと思っただよね。

「それなら、今度戸山さんや美竹さんたちとやるガールズバンドパーティー！に呼んだらどう？」

「えっ！それはいきなりすぎない？私たちがバンドしてるのだって知らないかもだし、そもそも興味なかったら晴人に悪いよ……放課後はいっつも忙しそうだしさ」

「あなたがそんなに弱気でどうするのよ」

「それは……」

「興味がないのなら私たちの演奏で、Roseliaの音楽で晴人を

振り向かせればいい。そうでしょ?」

いつにもなく真剣な友希那の顔を見て私自身ハツとさせられちゃったなあ。よくよく考えたら、これまで話す機会はいくらでもあったのに晴人にバンドのことRoseliaのことを話さなかったのは怖かったからかもしれないなあ。

晴人に興味を持ってもらえなかったら……バカにされてしまったら…… 晴人はそんなことをいうような人じゃないって頭では分かっているんだけどあと一歩が踏み出せていなかったんだよねーでも、友希那の一声で気づかされちゃったかな。私だつてブランドを帳消しにするくらいRoseliaのベースとして頑張ってきたんだもん。今更、幼馴染に対してビビってどうすんだって話だよ。友希那とRoseliaのみんなと一緒に頂点目指すんだもん。こんな小さなことで悩んでてもしょうがないよね。

「友希那に言われて気づかされちゃったな!もつと自分たちの音楽に自信を持たなきゃね」

「まったく、リサだったら。私たちはRoseliaなんだからちゃんとしてもらわないと困るわ!」

口ではそう言ってるけど、友希那の顔は笑ってたんだ。Roseliaを組んだばかりの頃はこんな風にはいかなかったけどRoseliaのみんなが私を、友希那を少しずつでいい方に変えたんだろうなあ。だったら、Roseliaの音楽で最近は関係の薄くなつてしまった晴人に幼馴染の二人は今こんなに頑張ってるんだってのを見せつけてあげないとね。見ててよ晴人!

「それでチケットはどうしよっか」

「えっ…… そこまで考えてなかったわ」

あはは、こうゆうところは三人で遊んでた時から変わってないなあ。昔から音楽以外のことは抜けてるところあるしねえ。まあ、そんな友希那も見てて可愛いし、面白いから好きなんだけどね。

「困ったわね。必要ないともって関係者用のチケットは他のバンドに譲ってしまったし……」

「え、本当に?! 全く友希那だったら…… それならワタシに任せて!

ちよつと考えがあるから」

「そう、悪いわね……」

「いいって、いいって。それよりも早く練習行こつ!!遅れちゃうよ」
さて、こうゆうときこそ私の顔の広さを生かさないとね!

そして、次の日の昼休み、私は同じバンド仲間でありバイト仲間、同じ後輩の

「そうゆうことならいいですよ。なんたってリサ先輩の頼みなんですから」

「そう言ってくれるとたすかるよ。今度、お礼するからよろしくね!」
「あいあいさ」

これで、モカにチケットを用意してもらえらることになったし、後はどうやって晴人に渡すかだけ。直接、晴人にライブに来てってチケットを渡すのもなんか違う気がするんだよね。どうしたものかと考えながら廊下を歩いてたら翔太が歩いているのを見つけた。そうだと、思い立って晴人と仲のいい晴人を頼ることにさせてもおつと!

「おーい、翔太!!」

「おう、リサじゃんか。俺になんかようか?」

「それがさあ……」

藁をもすがる思いでこれまでのことを翔太に話した。

「マジかーもし俺のチケットももらえるなら、翔太を連れていくぜ!もともと行きたかったんだけどあいにくチケット取れてなくなつてさ」
「本当に!じゃあ、モカにそのことも伝えておくね」

「おうよ。まあ、チケットと代償にモカに何をせびられるかが問題だけだな」

「それはねえ」

「。パンだな(だね)！」

モカに対する認識が翔太と一致していたなんてびっくりして思わず笑っちゃったよ。翔太も笑ってたしそうゆうことなんだろうけど、モカにといえぱやっぱりパンだよねえ」

「まあ、なんにせよだ。チケットは手に入るんだ。責任もって晴人を

連れていくよ」

「オツケー…それじゃ、よろしくね」

チケツトに関して翔太とモカに感謝だね。これで後はライブで頑張るだけ！

リサ side out

晴人 side

とりあえず、今日はいろんなことがあつて疲れた。配信するのは飯を食べて落ち着いてからにしようと思った。

「それにしても、あの二人がライブか」

小さい頃から友希那の親父さんの影響もあつて音楽に触れる機会が多かった俺たちだったが、高校生になってバンドという打ち込めるものを見つけて頑張っている二人のことを考えると自分のことのように嬉しかった。

場所やものは違つても今は俺もこれだと思えるもの『ゲーム実況』に出会つて自分なりに努力してこれまで続けてきたのだ。今の世の中ゲームをすること自体があまりいい目で見られるものではない。ときにニュースを見ればアニメやゲームが犯罪を助長させるといった意見も出ていたりする。そんなものはその個人の物であつてゲームやアニメのせいではないと思うのだが世間の見方はそうらしい。

実際問題、このストーリー一本で生計を立てている人もいないわけではない。ただ、甘いものではないし人気が直接収入につながるのだからシビアであるのは間違いない。最近ではとある動画投稿サイトでの広告収入だけで生計を立てる人が日本でも出てきたらしい。俺も、配信メインではあるが動画を編集することもあるので分かるのだが彼らは本当にすごいと思う。

動画の編集はとてつもない時間と労力、手間がかかるものだ。それを知ってから他の配信者や動画投稿者には尊敬の念しかない。

話がそれてしまった気もするが俺が基本的ににやっっていることといえど好きなゲームをプレイしながらその映像を視聴者が見れるようにサイトに共有する、そんなところだ。最近では人気のP〇BGやF〇r n i t eのバトルロワイアルゲームや特殊部隊になりきって爆弾を解除するゲームなどをメインに配信をしているのだ。

最初は視聴者もほとんどいない状況だった自分も配信を始めてもうすぐ二年近くなるがありがたいことに固定のリスナーさんがいたり投げ銭がいただけたりとお小遣いレベルではあるが収入も挙げられているのだ。これには、翔太や一緒に遊んでくれるゲーム仲間や配信者仲間の人の協力があったので感謝しかないのだが。

今度、お金が振り込まれたら翔太に何か奢ってやっても罰は当たらないだろう。ライブのこともあるしな。

そう息巻いていつものようにP Cの電源を入れ椅子に座りヘッドホンを耳に当てる。これで準備は整った。

「さて、リサ達も頑張ってたんだ。俺も配信がんばるぞい!!」